

れ、廿八日北庄を發して長濱に至り、柴田勝  
豊と相携へて湖上に浮び、十一月二日攝津寶  
寺に着して秀吉に會し、その使命を全くして  
十日北庄に歸つた。これは甫庵太閤記のいふ  
所である。川角太閤記では使者を利家一人と  
し、會見の場所を播磨姫路としてゐる。十一  
年勝家は秀吉と戦はんと欲し、三月四日利家  
以下を率ゐて發し、近江柳瀬附近に陣した  
が、四月廿一日佐久間盛政の軍敗れるに及ん  
で全軍退却した。秀吉追撃して廿二日府中に  
至り、利家の居館を訪うて和を議し、廿三日  
足羽河畔に進み、廿四日北庄城を攻めて之を  
陥れ、船橋を渡つて宿し、次日加賀に入り、  
遂に金澤城を領した。是に於いて秀吉は利家  
の戦功を賞して石川・加賀二郡を興へ、先の  
能登に加へて金澤に治せしめ、世子利長に石  
川郡四萬石を興へて松任に居らしめ、その舊  
領府中を除いた。

(三)金澤入城―利家の金澤入城がいつであつ  
たかは、金澤にとつて特に關心事であるが、  
それに就いては、越登賀三州志に載せる利家  
から富田景政に興へた消息に、『去廿五日小松  
の城我ら請取、久太へ相渡候。人數足弱以下  
千代まで遣し、彼城には我ら十人計付置、翌  
廿六日到宮腰着陣候。金澤城今日可相果様子  
に候。』とあるを引かねばならぬ。是によりて  
利家は廿五日小松に入つて村上頼勝からその  
城を受取り、堀秀政をして監視の任に當らし  
め、廿六日石川郡宮腰に入り、廿七日佐久間  
盛政の居た金澤城を片付ける豫定であつたこ  
とを知られ、而してそれは多分豫定の如くに  
實行せられたことなるべく、又翌廿八日秀吉  
が入城したことは秀吉の小早川隆景に興へた

消息に見える。たゞ秀吉が盛政の遺封を利家  
に興へることを、いづれの日に宣言したかは  
尙殘される問題である。

(四)金澤入城以後―天正十二年利家と佐々成  
政との關係急切となり、八月成政軍が加賀  
の朝日山嶺を襲うた時、利家は之に後卷した  
が、越中軍の退却した爲戦を交へるに至らな  
かつた。九月成政末森城を攻めた時、利家は  
十日兵を出し、十一日敵を破つて退却せしめ、  
十二日納馬し、十月十四日又先に成政の爲に  
奪はれた河北郡鳥越の回復に向かうたが、目  
的を達しなかつた。十三年二月利家村井長頼  
に越中蓮沼を侵略せしめ、自ら國境に出で、  
聲援に備へた。三月成政前役に報いんとして  
河北郡鷹巣に來侵したから、利家は急援した  
が、既に敵の退却した後であつた。八月秀吉  
の成政を征せんが爲軍を進めるや、利家は之  
が先驅として十九日金澤を發し、廿二日越中  
安養坊坂に陣したが、成政は廿九日降を納れ  
たから歸城し、尋いで九月十一日附を以て、  
秀吉から羽柴筑前守の號を讓られ、十一月廿  
九日左近衛權少將に任じ、十四年十二月秀吉  
の豊臣氏を賜はつた際には利家も亦豊臣氏を  
胃才を許され、十五年三月秀吉の九州を征し  
た時には、利家は京師に在つて禁關守衛の任  
に當り、六月佐々成政は封を肥後に轉せしめ  
られ、その前領新川郡は假に利家の治に委せ  
られた。十七年左近衛權中將に進み、十八年  
正月廿一日從四位下參議となり(本藩歴譜に  
利家の參議昇任を秀吉の書翰によりて十九年  
に在りとし、加賀藩史彙には右大臣晴季書翰・  
高德公書翰・御湯殿日記・公卿補任・時慶卿記・  
羽柴秀一等連署書翰によりて、十八年正月廿

一日とする。三月秀吉の關東に兵を動かすに  
及び、利家は利長と共に出陣し、信濃松枝・  
武藏松山・鉢形・八王子諸城を屠り、七月小田  
原陥落の後、檢田使となつて奥羽に入り、  
十一月金澤に凱旋し、十九年十月二十日參議  
を辭した。文祿元年以降秀吉の征明の軍を起  
すや、利家爲に畫策に參與し、三年正月五日  
從三位に上り、四月七日權中納言に任じ、五  
月二十日權中納言を辭し、四年三月六日近江  
今津・弘川の地を得て往返の旅次に便せしめ  
られ、同年また越中新川郡を増賜せられ、慶  
長二年正月十一日從二位權大納言に叙任し、  
同月十六日權大納言を辭し、三月十一日清華  
に准じ、三年四月二十日老を告げ、自ら加賀  
石川郡松任を、河北郡能登口郡一萬五千石・越  
中射水郡水見庄合計廿六萬石を養老封とし、  
近江領を夫人に興へ、子利長をして家を襲が  
しめ、八月八日秀吉に遺孤秀頼の傳育を託せ  
られ、その薨去の後家康と共に在外の大軍を  
收めるに力を致した。四年正月利家大坂に在  
りて病み、家康と漸く間隙を生じたが、相争  
ふの不利を思ひ、二月諸大老・奉行と共に家康  
と誓書を交換し、廿九日家康を伏見邸に訪ひ、  
三月八日又家康の答禮を受けた。利家の病は  
この後類に漸んだので、廿一日夫人に筆を執  
らしめて、遺誡十一條を記して之を利長に授  
けしめ、閏三月二日尙興に乗じて大坂城内山  
里の露地を逍遙したが、翌三朝五時溘然  
として薨じた。年六十二。四日喪を秘して遺  
骸を金澤に下し、四月八日城南野田山に葬り、  
高德院桃雲淨見大居士と諡せられた。

マヘダトシオキ 前田利興 ↓マヘダヨシ  
ノリ 前田吉徳。

マヘダトシカ 前田利豊 大聖寺藩主第十  
四代。加賀藩主前田齊泰の七男、母は明鏡院。  
天保十二年六月十二日金澤に生まる。幼名桃  
之助。天保十二年十一月廿四日加賀藩臣前田  
貞事の養子となりて貞用と稱し、安政元年正  
月十六日その家を襲いだが、二年九月廿八日  
離藩。十月廿九日改めて大聖寺藩主利行の後  
を受けて利益と稱し、十二月十六日從五位下  
飛騨守に叙任した。三年五月十五日初めて入  
部、四年六月廿三日利豊と改め、十二月十六  
日從四位下に陞り、慶應二年正月十五日侍從  
に任ぜられ、明治二年六月十八日大聖寺藩知  
事に任ぜられたが、四年七月十四日罷免。後  
宮内省に出仕し、十七年七月子爵を授けられ、  
大正九年七月廿七日正二位を以て薨じた。享  
年八十。東京府下雜司谷に葬る。利豊日蓮正  
宗に歸依し、法號を法徳院壽昌道潤日恭大居  
士と諡せられた。曹洞宗に在つては別に雲巖  
院雪庵竹徑大居士と稱する。竹徑は生前の雅  
號である。又その和歌集に峰要集がある。

マヘダトシカツ 前田利勝 ↓マヘダトシ  
ナガ 前田利長。

マヘダトシカツ 前田利雄 ↓マヘダムネ  
トキ 前田宗辰。

マヘダトシコレ 前田利之 大聖寺藩主第  
九代。利物の長子、母は梅芳院。天明五年十  
月十七日大聖寺に生まる。幼名虎次郎、寛政  
十年二月廿二日主水と改めた。文化三年正月  
廿一日從兄利考の嗣となり、二月廿三日江戸  
に着し、三月十四日家督を相続し、四年十二月  
十六日從五位下備後守に叙任し、八年十二月  
十一日從四位下に陞叙。文政四年十二月廿七  
日加賀侯前田齊廣の請により、本高七萬石の